

イバレントな思いがあった。そんなにも明解で迷いが無くて良いのか、といった屈折した心情があったのだと思う。

また、大戦に関することもあった。私の恩師は、経済学部の手手であった昭和十六年に出征し、北支からインドネシアに転戦し二十二年に復員した。おそらく戦場での過酷な体験と塾長小泉信三の言動との間には、言葉にしがたい違和感があったのだろう。大変に穏やかな方であったが、小泉信三については余り語られず、語る時には言外に批判的なニュアンスがあった。誰があの時代の塾長を務めたとしても、小泉信三以上に出来なかつたことは、誰もが分かっていた。それでも割り切れないものが残ったのだろう。今回の小泉展を訪れた七十歳近いある名誉教授が、「よくこういう展覧会が出来たね。二十年前では出来なかつた。時代だね。」と言われていたが、それがかつての雰囲気を物語っている。

準備過程で感じた小泉信三の力

このような、個人的な視角はあったものの、福澤研究センターの責任者として展覧会の成功のために出来る限りのバックアップを行った。具体的な展示内容の

作成は、これまで関係資料の収集・整理に尽力してきた山内慶太郎（看護医療学部教授）、都倉武之君（福澤研究センター専任講師）、神吉創二君（幼稚舎教諭）の三君が、広報室と協力しながら、ほとんど全てを担ったと言つてよい。わずか四カ月の間に、あれだけの展覧会を準備することは並大抵のことではない。連日、深夜までの作業がつづき、都倉君などは体重が減っていることが傍目からも明らかであった。

しかし、蓄積疲労とは裏腹に、準備の進行とともに三君が、ますます小泉信三に惹きつけられ、のめり込んでいくことも見て取れた。準備過程で発見した新資料について語る時などは、本当に目が輝いていた。

歴史上の人物に関する資料の中には、研究者をとらえて引き込んでゆく力を持つものがある。その人物が、資料を通して迫ってくる生の魅力と言つてもよい。三君を駆り立てていたものは、そのような小泉信三とその資料の力であったような気がする。

展示を終えて

展示に当たっては、アートセンターの

前田富士男所長の御好意により、一五〇年事業室所属の学芸員である平塚泰三君と福士理君が、展示会社との交渉を含め、全面的に参加協力して下さった。美術館勤務の経験がある両君の適切な指示があったならば、展示会場はあのように見やすく整わなかつたに違いない。

そのような展示の準備は、内覧会の前夜遅くまでかかった。飲まず食わずで、最後の仕上げを確認し、後を広報室の渡部淳課長に託して、皆が会場の図書館旧館を出たのは、午前一時に近かつたと思う。

私は、関係者として控えているのみであったが、実際に作業を担った方々の専心する姿を見ている内に、あらためて間接的に「小泉信三の魅力」の存在を実感した。開催前夜、作業が終わり、タクシーで自宅に向かいながら、いずれ小泉信三の著作を、きちんと読んでみようと考えた。主催者にとつても、新たな世界を知る意義深い展覧会であった。

